

ジョン・W・トリート 『グラウンド・ゼロを書く——日本文学と原爆』

齋藤 一

私は英文学研究者である。最初はコンラッドという小説家の作品論を書いていた。一九九五年頃からコンラッドなどの英文学作品を日本において読むこと自体の歴史的意義を問い直すようになった。こうした研究経歴の持ち主である私がなぜこの本を書評しているかと言えば、それはこの十年間「他流試合」をさせていただいた川口隆行氏の依頼があったからである。

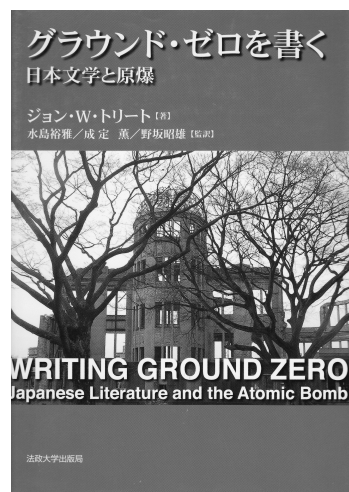
二〇〇〇年頃から、最初はウェブ上の揭示版を通じて、やがて学会や研究会などで、私は川口氏や柳瀬善治氏と交流を深めてきた。『原爆文学研究』もすべてご恵贈いただいた(個人的には『原爆文学研究』撰集を企画すべきであると確信している)。川口氏の『原爆文学という問題領域』や柳瀬氏の『三島由紀夫研究』(特に第四章「知的概観的な時代」の「終末観」と「民族的憤怒」——三島由紀夫における原爆表象)も読ませていただき、大いに刺激を受けてきた。しかし、本当に「原爆文学」というものが畏怖すべきものとして私の目の前に立ち現れてきたのは、二〇一一年三月一日の東日本震災と、その後に生じた福島第一原子力発電所事故のあとのことである。震災直後の十日間ほどの細かい記憶はない。

正直に言うとうと、あまり思い出したくない。しかしその当時のツイッターやブログ、安否確認メール等々を確認すると、不安、その裏返し、の昂揚、諦念、深い疲労といった複雑な感情を吐露していたようである。それを知っていた川口氏は、私、あるいは私のような境遇にある多くの人々にとって、本書が必要であると考えたのではないかと想像する。ともあれ、私は二〇一一年八月に本書を集中して読んだ。強烈な読書体験であった。この体験をごく簡潔にまとめることで書評に代えさせていただきたい。

第一に、本書は日本の特に東北・北関東に住む人々に取って恐ろしくそして有益なリーディングリストである。昨年(二〇一〇年)七月に本書が出版された後に川口氏・柳瀬氏から本書をご恵贈いただき、今年の夏に本書を通読するまでは、私の原爆文学についての知識は十代後半で読んだ大江健三郎『ヒロシマ・ノート』、井伏鱒二『黒い雨』、原民喜『夏の花』位に限定されていた。本書を読まなければ、私は大田洋子の作品を知ることにはなかった。小田実『HIROSHIMA』(一九八一年)を読みふけることもなかった。福永武彦『死の島』(一九七一年)を購入することもなかった。そして、「生ましめんかな」の作者栗原貞子について、「核爆発に直面してなお楽観的に持ち得た勇氣(中略)が、後の栗原の作品では苦しいシニシズムに取って代わられたこと」(二二〇頁)を知ることにはなかった。特に栗原についてのこのコメントは、これから長く続く低線量汚染と共に生きていくことになる私(もちろん逃げるという選択肢はある)の心を打つものがあった。

本書に導かれての原爆文学の読書は私のものの見方を変えた。一例を挙げる。私は本書第八章を読んだ後に『黒い雨』を再読し

た。そしてこの再読のおかげで、福島第一原発が水素爆発をおこし（停電のため爆発の映像をリアルタイムで見ることができなかったが、携帯ラジオでその事実を把握していた）、放射性物質を含んだ雲が頭上を通り過ぎる可能性には気づいていたにもかかわらず⁽¹⁾仕事を放棄して脱出することもできなかった私（たち）の勤勉さを、石炭の確保に奔走する閑間重松の勤勉さに重ねて愕然とすることとなった。情報がない。だから逃げる勇気が出てこない。仕方がないから普段通り（以上に）働くしかない。——そして、今年一〇月に、原発事故の対応拠点であるJヴィレッジがある福島県広野町を早朝六時に訪れた際、現場にむかう作業員が運転する多数の自動車国道六号線を北上し出勤する姿を目撃して、この勤勉さとは一体何なのか、真剣にそれを考えなくてはならないと感じた。



これらの整理されているとはいいいがたい感想は、本書における『黒い雨』論それ自体に直接的に触発されたものではなく、むしろ徐々にその実態が明らかになりつつある深刻な状況における私の『黒い雨』の再解釈あるいは専有であると言うべきである。原爆文学の再読のきっかけ

は本書でなくともよい。しかし、「訳者あとがき」に記されているように質量共に圧倒的な本書が『黒い雨』を論じているという事実それ自体が、良い意味での権威となつて、私を『黒い雨』の再読に赴かせたことは否定できない。この難解な書物（訳出の非常な苦勞は一読して伝わってくる）を翻訳した訳者たちの熱意によつて、原爆文学の読書が力強く促され、被災地の（私たち）の経験となり、サバイバルを促す力になつて欲しいと願っている⁽²⁾。

第二に、本書の理論的な課題について触れておきたい⁽³⁾。トリートは「序文」でエリ・ヴィーゼルに触れつつ、ホロコースト文学を取り組んできた表象の（不）可能性についての議論を日本の原爆文学において再考し、原爆文学の歴史的・文学史的な意義を英語圏において確立しようとしている。このトリートの姿勢は、広島と長崎に原子爆弾を落とした当事国に住む研究者として賞賛されるべきものである。

トリートが原爆文学に見いだした重要な問題は、本書のタイトル *Writing Ground Zero* に刻み込まれている。ロラン・バルト「零度のエクリチュール」（一九五三年）の英訳タイトル *Writing Degree Zero* を意識したものであろう本書のタイトルは、爆心地において「ゼロ」を「書く」という困難さに取り組もうという宣言である。言いかえると、大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（一九六五年）の冒頭にある、「爆心地の話をつたえてくれる人は、いません」という言葉——爆心地の挿絵（丸木位里・赤松俊子『ピカドン』ポツダム書店〔1950年〕による）の下に印刷されている——に文学者はどう答えるかというものである。

この課題を深化させるため、トリートはヘイドン・ホワイトと

フレドリック・ジェイムソン（ちなみに本書もジェイムソン『政治的無意識』もその第二章がジャンル論になっていることは興味深い）を参照している。前者はホロコースト研究の文脈において、後者は後期資本主義時代におけるマルクス主義者としての立場から、それぞれ表象の（不）可能性の問題について語っている。

ホロコースト研究が、十九世紀ロマン主義の時代遅れの表象概念に基づいて、「反修辭」anti-rhetoricalを推進するのは間違いだと主張するホワイトは、その「奇妙な」strangenessが私たちを魅惑し拒絶もする、専心すべき出来事としてホロコーストを扱うことよって、私たちは「新たなもの」を表象できるのだと提案している。ホワイトによれば、この奇妙さはマルクスとヘーゲルが予想できなかった、まさに二十世紀の「奇妙さ」であり、また人間味のない文明よって作り出され、「中動態」middle voice——文字的なものと像的なものとの間の、また、主観性と客観性の間の——で表象されることを必要とする。ホワイトが探求しているのは、虐殺自体はもちろん、その歴史的コンテクストも消し去ることなく、しかも私たちの紋切り型の表象に回収されないような、ポスト虐殺的な観点であり、また個人的でも社会的でもありながら、私たちの個人としての存在とも、私たちが共有する体験とも違う、語りの中心となる場なのである。（二〇七頁）

マルクス主義批評家であるフレドリック・ジェイムソンは、「物語のある種の型式」や「証言的な文学」において、彼の

いう「古いブルジョワ的自我」と「今日の組織化された社会の中で神経症的な主体」と並んで共に機能する、「集合的な主体性」を探求すべきだと述べている。（二〇八頁）

こうした「中動態」や「集合的な主体性」の実践例として、例えば第六章では、「語る」tellというより「描き出す」show、「」の事件を一時点（八月六日）または単一主体（「私」）に制限されることに抵抗する」（三〇〇頁）大田洋子『人間檻樓』（一九五一年）が論じられている。また第一〇章では小田実『HIROSHIMA』（一九八一年）が評価されている。確かに、私もこの小説の第三部、ゴーストたちの邂逅は、まさにホワイトが言うところの「中動態」における実践として読んだ。なお、これは無い物ねだりではあるが、「中動態」が「文字的なものと像的なものとの間」における態であるとすれば、やはり活字以外の作品によるグラウン・ド・ゼロ表象についてももう少し長い議論があってもよかったと思われる。

最後に、どうしても触れておかなければならないことがある。それは、本書の著者トリートがおそらくは原爆文学における表象の（不）可能性の問題を重視するあまり、「チエルノブイリ原発は世界中に影響を与えたが、恐らくチエルノブイリに関する固有の書物しか生み出さないだろう」（四頁）と書いていることである。これはホロコーストがその後の（詩）を変えてしまったのと同様に、原子爆弾の炸裂により世界は決定的に変わってしまったことに、アメリカ人としてのトリートが強い応答責任を感じているからであろう。それは理解できる。同時に、「チエルノブイリ」

が当該地域に「関する固有の書物しか生み出さない」としても、まずはそれを生み出す努力が必要であることは言うまでもないだろう。トリートは〈グラウンド・ゼロを書く〉ことの重要性の賞揚と同時に、「チエルノブイリに関する固有の書物」をも強く擁護すべきだった。

付言すれば、「固有の書物」がそれ自体の強度によって、あるいは散種によって、固有性を自ら乗り越えてゆく場合もあるだろう。放射性物質による長期汚染をテーマとした作品を表象の観点から取り上げる価値がないと誰が言えるだろうか。トリート自身も、原爆投下の「それから、のこと」(第一章のタイトル、小田実の言葉)——「生き残った人々は堪え忍び、立ち直り、恋をする。彼らは病気になる死ぬ者もいるし、お互いに裏切りあい、繁栄し凋落する」(二九六―七頁)——を苦心惨憺して書いた大田洋子『人間檻樓』を評価しているのである。また、放射性物質汚染ではなく有機水銀汚染の話ではあるが、池澤夏樹個人編集『世界文学全集』第三集(河出書房新社)に収録された石牟礼道子『苦

海浄土』(刊行は二〇一一年一月)もある。トリートは「チエルノブイリ原発は(中略)恐らくチエルノブイリに関する固有の書物しか生み出さないだろう」と書く必要はなかったのである。

注

1 多量の放射性物質を含んだ雲は、三月一四日から一五日にかけて、私が住むつくば市上空を通り過ぎたようである。例えば、「放射能、2ルートで関東に セシウム汚染図12都県分」(二〇一一年一月二四日付『朝日新聞』http://www.asahi.com/national/gallery_e/view_photo.html?national-pg/1023/TKY201110230383.jpg)を参照せよ。

2 私には本書を読む物理的・精神的余裕があったことは明記しておきたい。

3 以下の理論に関する記述については、柳瀬善治氏との意見交換に多くを負っている。特に記して感謝したい。

(水島裕雅他訳 法政大学出版局 二〇一〇年七月 六七八頁 九五〇〇+税)